
シンポジウム 1

ハイリスク前立腺癌に対する治療戦略 game changer

司 会	武 中 篤 (鳥 取 大)
	雑 賀 隆 史 (愛 媛 大)
演 者	高 橋 哲 (高槻病院)
	河 村 英 将 (群 馬 大)
	藤 井 智 浩 (川崎医科大)
	森 實 修 一 (鳥 取 大)
	三 浦 徳 宣 (愛 媛 大)

司会のことば

早期前立腺癌の予後は極めて良好であるため、局所療法の興味は「ハイリスク前立腺癌の治療成績をいかに向上させるか」に移行している。今回は、以下の項目について game changer として期待されているモグリティーをそれぞれの専門家に解説していただくこととした。

まず、治療成績を議論する際には、画像診断における正確な staging が求められる。とくにハイリスク前立腺癌では局所進展度は勿論のこと、骨盤内リンパ節転移の有無や遠隔転移の評価の正確度が治療戦略の決定と評価に大きな影響を与える。最近では全身 MRI や前立腺特異的膜抗原 (prostate specific membrane antigen : PSMA)-PET などの次世代画像診断が急速に発展している。そのため高橋哲先生に次世代画像診断の現状と可能性について、従来用いられてきた画像診断手技との比較を、本邦よりも応用が進んでいる欧米からの報告をもとに解説頂いた。さらにこれらによる診断 (検出) の向上が Will Rogers 現象として知られる staging migration を生じさせることから、一定の診断基準で治療適応を判断し評価を行い続けることが困難になり、新たな診療戦略を伴わなければ混乱を来してしまうため、画像診断医、泌尿器科医、そして医療行政との間に、正しく統一した

認識を持つ必要性について言及頂いた。

次いで、ハイリスク前立腺癌の治療戦略について、まず放射線治療として、近年注目されている寡分割照射による IMRT の治療成績、本邦で発展してきた重粒子線治療の良好な線量分布とより高い生物効果を活かした治療成績について河村英将先生から現状の報告を頂き、至適症例と現在と将来における課題について解説頂いた。

また、ハイリスク前立腺癌への外照射併用高線量率組織内照射の治療効果、合併症そして総合的有用性について長期かつ多数例の治療経験をもとに、予後規定因子を含めて藤井智浩先生に解説頂いた。

ロボット支援前立腺全摘除術時代における、ハイリスク前立腺癌に対する手術療法の意義や治療成績向上への試みとして、内分泌療法にドセタキセルなどの抗癌剤を併用した術前化学内分泌療法の経験について森實修一先生に解説頂いた。またロボット手術ならではの拡大摘除/拡大リンパ節郭清の治療経験からその治療的意義と treatment failure や再発に関与する因子について三浦徳宣先生に解説頂いた。

これらについては、未だ十分なエビデンスレベルではないものの、最新の情報提供と近い将来 game changer となりうる治療戦略としての新しい知見が集められ、今後の実地臨床に役立つシンポジウムと考えられた。